

19世紀のボルチモアにおけるガーデン・スクエアに関する研究

——都市緑地の所有者，利用者，その意匠——

The Garden Square in Nineteenth-Century Baltimore:
Owner/User Relations and the Design of the Urban Green Space

住居学科 鈴木 真歩
Dept. of Housing and Architecture Maho Suzuki

抄 録 住宅地開発とあわせて建設させる緑地，ガーデン・スクエアについて，19世紀のボルチモアにおける事例の概要を新聞記事，同時代の図書，および既往研究からまとめた。それによれば，その敷地はいずれも市に帰属し，また建設費も市が負担しており，そのためか鉄柵で囲まれてはいるが全市民にひらかれていた。更にこれまで知られていなかった1873年からの鉄柵撤去のムーブメントの経緯を明らかにした。その中で市内のあらゆる緑地の鉄柵が取り払われ，またその後柵のある緑地は作られなくなった。これは大陸ヨーロッパの例を意識したものであり，柵がなくても緑地を台無しにしない市民の文化レベルの高さを示すことができるということが推進の理由の一つとして主張された。またこの結果，その利用実態のみならず意匠の面からもモデルであったイギリス式のスクエアから離れることになった。

キーワード：ボルチモア，19世紀，ガーデン・スクエア，鉄柵，地方自治体

Abstract This paper presents an overview of the development of green spaces in urban residential areas in nineteenth-century Baltimore. Drawing on newspaper articles, contemporaneous books, and existing research, I show how Baltimore constructed a series of city-owned publicly-accessible garden squares. I examine the successful 1873 campaign to remove the iron railings that enclosed these locations, showing how campaigners claimed the absence of such railings in continental European squares demonstrated cultural superiority. Due to this movement, Baltimore's garden squares diverted from the English model, not only in their funding strategies, but also in their design.

Keywords : Baltimore, the nineteenth century, garden squares, iron railings, municipal government

1. はじめに

「ガーデン・スクエア」は，18世紀以降のイギリスの都市型住宅地開発でみられた緑地で，権利を持つ周辺住民のみが利用するために鍵付きの鉄製の柵で囲われているという特徴がある。イギリス文化の影響を残した19世紀のアメリカではニューヨーク，ボストンとメリーランド州ボルチモアといった大都市で例があったことが確認されている¹⁾が，それほど多くが作られないうちに一般に開放される緑地「公園」に取って代られた。これらのうち

ボルチモアでは，当初ガーデン・スクエアとして建設されたものが現在までに柵のない公園になったという独自性があるが，その経緯などは確認されていない。本研究では，19世紀のボルチモア・サン紙の記事²⁾ *¹とスクエアの記述がある同時代の図書³⁻⁵⁾，及び関係する既往研究⁶⁻¹¹⁾から同市でのガーデン・スクエアに関する動向の概要を明らかにする。

2. 19世紀までのボルチモアの都市発展とガーデン・スクエアの盛衰

ボルチモア市はワシントン特別区などと共にチェサピーク湾を共有する立地であって、独立前は西インド諸島への穀物の輸出港として、19世紀前半からはボルチモア・オハイオ鉄道を利用した中西部向けの商品の製造および集散地として成長した。人口は独立戦争直後の1790年は1万3,503人であったが、1830年に8万人を超え、それから17万人弱となる1850年までニューヨークに次いでアメリカ第二位の地位を誇った。急速に拡大する都市の開発をコントロールするものとして、1823年に測量士トーマス・H・ポップルトンが港周辺の既存の街路のグリッドに加えて角度の異なるいくつかのグリッドを組み合わせた都市計画を作成した。しかしこの時、公園や緑地などの計画は含まれていなかった^{*2}。

こうしたなか、既存の市街地の外側の大地主がロウハウス（連続住宅）による住宅地開発を行うようになると、ガーデン・スクエアが導入されるようになった。最も早い例は、港湾地域から約1マイル北の高台に造成された「マウント・ヴァーノン・スクエア」「ワシントン（・モニュメント・）スクエア」と呼ばれた2つの緑地である。この地には1815年定礎のジョージ・ワシントンの巨大な像があり、地主がその周辺を宅地開発するにあたり1832年に計画したものだった。この二つのスクエアはこの像で交差する十字型をしているのが独特であるが、鉄柵で囲まれており、門は常に閉められていた（図1）ので、ガーデン・スクエアの範疇に入るといえる。それまではワシントン像の管理小屋のほかは何もない丘だったが、開発が進むにつれて市内有数の高級住宅地としての名声を得ることになる。

もう一つの初期のスクエアは、この十字のスクエアから真西へ1マイルほどにつくられたフランクリン・スクエアである。1835年に建設業者、ジェイムズおよびサミュエルのキャンビー兄弟がジェイムズ・マクヘンリー博士の相続人達から30エーカーの土地を購入し、大規模な中流向けの住宅地開発を始め、そのうち2.5エーカー分を39年に市に譲渡することにした。1850年から住宅の建設が進み、1852年までに铸铁製の柵がめぐらされ、噴水、腰かけが設置された。

この後、40年代から70年代にかけて当時の市の



図1 1850年のマウント・ヴァーノンおよびワシントンの両スクエア

北部で住宅地開発が進み、そこではガーデン・スクエアが多く建設された。ボルチモアはワシントン像が設置されたチャールズ・ストリートを中心にウェストとイーストに分けるのが慣例なので、そうした立地で分類すれば、フランクリン・スクエアはウェスト・ボルチモアに位置し、同地区にはその後ユニオン（1847年）、ラファイエット（1859年）、ハーレム（1868年）の各スクエアが作られた。イースト・ボルチモアでもジャクソン（1844年）、マディソン（1853年）、ジョンソン（1878年）、コリントン（1880年）の各スクエアが続いた（図2）。

これらのスクエアは、フランクリン・スクエアと同様、鉄柵に囲まれ、内部は直線、あるいは曲がりくねった歩道で分割され、残りの部分を芝生や園芸植物が埋め、彫刻で飾られた噴水や装飾にあふれる腰かけやあずまやが点在する、いかにもガーデン・スクエア的な意匠を持っていた。なお噴水はガーデン・スクエア一般によく見られるモチーフであるが、特にボルチモアは湧水に恵まれた土地であったためその水で賄われることが多く、たやすく魅力的な空間を演出することができたであろう。また最も面積が広いハーレム・スクエアでは多様な植物のベッド（幾何学図形に成形された植え込み）が多数作られ、園芸による装飾美が見事なスクエアとして知られた。

以上に加えて、市内に類似する緑地がいくつかあるので整理しておこう。緑地の類型として、比較的大きな通りの中央部分を植樹し、歩行者に開放するようなものを「ブルバール」と呼び、1850年代のバリの大改造で登場して以降欧米諸都市で真似ら

図2 ボルチモアのガーデン・スクエアと類似の緑地

れたが、ボルチモアにおいても作られた。すなわちユートー・プレイス（1853年～）、パーク・プレイス（現パーク・アヴェニュー）（1860年）、ブロードウェイ公園（1870年頃）がそうであるが、これらは「スクエア」的な造形も持っていた。例えば、ブロードウェイ公園のうちボルチモア・ストリートからマクエルダリー・ストリートまでは「ブロードウェイ・スクエア」と呼ばれ、鉄柵で囲まれ鍵がかけられるようになっていた。また6ブロックの緑地のつらなりからなるユートー・プレイスもそれぞれが鉄柵で囲われ「ユートー・プレイス・スクエア」と呼ばれた。パーク・プレイスについては、鉄柵についての記録は見られないが、「パーク・プレイス・スクエア」と呼ばれていたことがあった。

また、天然の泉の周辺を市が取得して緑化したものがスクエアになることもあり、イースト・ボルチモアのカルヴァート・シティ・スプリング（不詳）やイースタン・シティ・スプリング（1818年）、ウェスト・ボルチモアのパーキンズ・スプリング・スクエア（1872年）がそうである。うち、前2者については鉄柵があったことがわかっており、後者については地主が土地を提供し公園化を陳情したので、ガーデン・スクエアの形成過程に似たものであったことが推測される。一方イースト・ボルチモアの「ウェルズとマコーマスの記念碑」の周辺を整備したものが「アシュランド・スクエア」と呼ばれたことがあったが、柵は作られず、現在も石畳敷きのひらけた空間である。また住宅地開発との結び付きも見受けられないため、あくまでモニュメントに付属する広場であったと考えられる（表1）。

なお都市計画にはなかったものの、これらと前後して、池や森、散策路などがある公園も実現している。その最初の例は、1827年にイースト・ボルチモアの地主ウィリアム・バターソンが市に土地を寄贈して開設が決定したバターソン公園である。そして50年代には労働者人口の増加を受けて誰もが利用できる大きな公園建設への機運が高まり、またちょうどその頃営業が始まった鉄道馬車から少なからぬ税収を得た市は、1859年にポップルトンの都市計画の外側に用地を取得してドルイド・ヒル公園の建設を開始した。その後この税収を得ることができた50年間、市は多数の公園を建設した¹²⁾。80年代以降ガーデン・スクエアの建設が見られなくなるのは、こうして行政が提供する公園が充実したこ

とが大きな理由であると考ええる^{*3)}。

3. スクエア建設における行政の役割とスクエアの利用実態

ガーデン・スクエアは不動産開発にあわせて作られる緑地であるため、私有のままであること通例である。たとえばニューヨークのグラマシー・パーク（1831年）では、デヴェロッパ、サミュエル・ラッグルズが土地を5人の受託人（trustee）に譲渡し、その際約款によって、受託人たちが公園を植樹し柵で囲うなどの整備をし、またその後も維持管理するように定めた。またその利用権は、スクエアに面して作られる住宅用地66区画の住人に譲渡された¹³⁾。

一方、上に挙げたボルチモアのスクエアは、その敷地はほとんどが市の所有であった。その土地取得時の状況はスクエアによって若干違いがあり、ワシントンおよびマウント・ヴァーノン、ユニオン、ハーレム、ジャクソンの場合は寄贈であり、フランクリン、ラファイエット、マディソン、ジョンソン、コリントンは有償の譲渡である（表1）。なお1859年のラファイエット・スクエアの土地取得時に支払われた対価は、周辺道路の舗装を地主が行ったことに対する報酬も含んで1万5千ドルであった。フランクリン・スクエアの場合も、39年の時点では1ドルで譲渡されるはずが47年に1万5千ドルで譲渡されているので、ラファイエット・スクエアに似た経緯があった可能性がある。またガーデン・スクエアに準ずる緑地のうち、プールパール型、泉型のいずれでも市が所有することがほとんどで、唯一パーキンズ・スプリング・スクエアだけはリースだが、その契約の終了時には市が優先的に購入できるような条件になっていた。

また、ボルチモアのスクエアの緑化や整備は、土地の譲渡時の契約などで市の負担で行われることが約定されていることがほとんどであった。例えば、フランクリン・スクエアでは周辺の住宅の建設がある程度進んだ時点で市が6フィートの立派な鉄柵を建て、その周りの歩道を舗装することが契約されていた。またユニオン・スクエアでも、寄贈時の契約で「化粧仕上げをした花崗岩の基礎で支えられた、少なくとも高さ6フィート以上の適切な鉄製の柵を市の費用で建てること」が定められている。その他、ラファイエット、ハーレムの両スクエアも市の負担で柵が作られた。

19 世紀のボルチモアにおけるガーデン・スクエアに関する研究

表 1 ボルチモアのガーデン・スクエアと類似の緑地の概要

立地	緑地の種類	名称	土地権利 移転時期	建設 時期	譲渡前の土 地の所有者	譲渡時の整備 内容の指定	ガーデン・スクエア内部の意匠 (鉄柵撤去以前)	出典(新聞記事以外のフル タイトルは引用文献を参照)
ヴァーノン地区	ガーデン・スクエア	ワシントン・(モニュメント)・スクエア Washington Monument Square マウント・ヴァーノン・スクエア Mt. Vernon Square	1851年以降 ←寄贈	1850年	ジョン・イーガー・ハーワードの相続人	不詳	木製の柵→鉄柵 柵のすぐ外に並木 おそろく芝生に孤立した樹木が数本	Sachse: View of Baltimore City (1850) (Hayward and Belfoureに掲載された図版より) Baltimore City: Report in Reference to City Property, 17 The Public Squares of Baltimore, <i>Baltimore Sun</i> , July 7, 1873, 4 Olson, 115 Chapelle, 97-98 Hayward and Belfoure, 34
		フランクリン・スクエア Franklin Square	1839年 ←寄贈申出 1847年 ←有償譲渡	1851-52年	ジェイムズ・マクヘンリー博士の相続人 アー・ジェイムズとサミュエル・キャンビー兄弟	「パブリック・スクエアとして永久に保持され、改良され、美しく飾られる」 「市が勾配をつけ、柵をもうける」 8軒以上の住宅が建つまでに、立派な6フィートの鉄柵を建て、その周りの歩道を舗装する	鉄製の柵 曲線的歩道 噴水(天然の湧水) 腰かけ ガス灯 クラジロ・コナギ、カエデ、アメリカサイカチ、ボダイジュ、ボブラ、ヒマラヤ杉など	Baltimore City: Report in Reference to City Property, 17 Railing and Rallery About the Public Square, <i>Baltimore Sun</i> , May 31, 1873, 5 Chapelle, 98 Hayward and Belfoure, 60
ウエスト・ボルチモア	ガーデン・スクエア	ユニオン・スクエア Union Square	1847年 ←寄贈	1850年頃	ジョン・ドネルの相続人	化粧仕上げをした花崗岩の基礎で支えられた、少なくとも高さ6フィート以上の適切な鉄製の柵を市がスクエアの周りに建てさせる	鉄柵 天然の泉(余分な水の権利はボルチモア＆オハイオ鉄道に売却) ペディオン ボブラ、カエデ、トリネコ	Baltimore City: Report in Reference to City Property, 17 Railing and Rallery About the Public Square, <i>Baltimore Sun</i> , May 31, 1873, 5 Scharf, 279 Hayward and Belfoure, 65
		ラファイエット・スクエア Lafayette Square	1859年 ←有償譲渡	1859年-1870年	ネル・ワイス ジェイコブ・ホフマンらの地主	「良質の、丈夫な柵で囲われる」 6軒の住宅が建てば市が柵をめぐらす	鉄柵 曲線的歩道 噴水 (南北戦争中に北軍が野営地として使い、一旦荒廃した後) 青銅製の噴水	Railing and Rallery About the Public Square, <i>Baltimore Sun</i> , May 31, 1873, 5 Hayward and Belfoure, 68 Scharf, 280
		ハーレム・スクエア Harlem Square	1868年 ←寄贈	1876年まで	トーマス・エドムンソン博士の相続人	「マディソン・スクエアと万事似たような木製の囲い」で囲われる	高さ5フィート(150センチ程度)の木製の柵と門 曲線、直線の歩道 天然の泉 掘り当てる鉱泉を粗石の大理石で飾る パディリオン 様々な植物のベッド(27区画)や土手 カエデやトリネコ、ニレ、カバ、ヤナギやボダイジュを含む400ft.の樹木	Railing and Rallery About the Public Square, <i>Baltimore Sun</i> , May 31, 1873, 5 The Public Squares of Baltimore, <i>Baltimore Sun</i> , July 7, 1873, 4 Scharf, 279
		ユート・プレイス Eutaw Pl.	1853年- ←寄贈	1853年-1876年	ヘンリー・ティファニー	不詳	鉄柵 彫刻などで飾られた豪華な噴水2つ (住人の寄贈による)	Scharf, 281
	天然の泉	パーク・プレイス・スクエア Park Place Square	1860年 ←市議会において土地取得の決議	不詳	不詳	不詳	敷地境界には花崗岩の緑石 芝生 噴水	Scharf, 280-81
		パーキング・スプリング・スクエア Perkins Spring Square	1872年 ←リース開始	不詳	ジョセフ・パーキング博士	不詳	ヴィクトリア朝風ムーア様式のあずまやで覆われた天然の泉 花物、樹木植物(コリウスやパチュニア)のベッド(鐘、星、盾などの形)	Scharf, 281 Bowditch, 122
	イースト・ボルチモア	ジャクソン・スクエア Jackson Square	1844年 ←寄贈	不詳	ロバート・ハーワード	不詳	1873年時点で「開発されていぬい区画」	Baltimore City: Report in Reference to City Property, 17 The Public Squares of Baltimore, <i>Baltimore Sun</i> , July 7, 1873, 4 Scharf, 281
		マディソン・スクエア Madison Square	1853年 ←有償譲渡	1853年から1858年	アーチボルド・スターリング	不詳	鉄柵 コンクリート舗装され曲線的な歩道に緑陰樹が並ぶ 噴水、池 ひし形、長方形の芝生 およそ250の樹木(主にカエデ、ボダイジュ、シダレヤナギ、野生のニレ) コリウスとバラのベッド	Local Matters - Madison Square, <i>Baltimore Sun</i> , Oct. 9, 1879 The Public Squares of Baltimore, <i>Baltimore Sun</i> , July 7, 1873, 4 Scharf, 281
		ジョンソン・スクエア Johnson Square	1878年 ←有償譲渡	1881年以前	ジョージ・R・ウィッカーズ	不詳	通りより高台となっている主要部に上るための大理石の階段	Scharf, 280 Latrobe, 9
		コリントン・スクエア Collington Square	1879年 ←検討開始	1880年まで	グレン家	不詳	不詳	New Paks, <i>Baltimore Sun</i> , April 18, 1879 Latrobe, 10 Hayward and Belfoure, 72
イースト・ボルチモア	天然の泉	カルヴァート・シティ・スプリング Calvert City Spring	不詳	1848年以前	不詳	不詳	「鉄柵で囲われ、ニレの陰に覆われた美しい小さな公園」	Local Matters - Public Improvements on Broadway, <i>Baltimore Sun</i> , June 11, 1870, 4 The Public Squares of Baltimore, <i>Baltimore Sun</i> , July 7, 1873, 4 Scharf, 279
		イースタン・シティ・スプリング Eastern City Spring	1818年、1837年 ←一部寄贈、一部有償譲渡	不詳	ジョン・ストリッカー	不詳	鉄柵 噴水 複数の影樹 大きな緑陰樹	The Public Squares of Baltimore, <i>Baltimore Sun</i> , July 7, 1873, 4 Scharf, 280
	記念碑・主要な建物の前	アッシュランド・スクエア Ashland Square	1850年代 ←寄贈	1871年から73年	マレー夫人	ウェルズとマコマスの埋蔵所をそのまゝにし、その事件についての記念碑を建設する	オベリスク形の大理石のモニュメントは八角形の鉄柵で覆われ、その外側は花崗岩の緑石に囲まれた円形のシンジヤニ舗装。 広場自体に対する緑化や装飾は不明。	The Public Squares of Baltimore, <i>Baltimore Sun</i> , July 7, 1873, 4 Scharf, 267

こうしたボルチモアのガーデン・スクエアの所有・負担関係に似たものとして、ニューヨークのスタイベサント・スクエアがある。1836年、地主ピーター・ジェラルド・スタイベサントは、鉄柵の設置などを市の費用で行うという条件で所有する地所の一部を公園用地として市に譲渡した。これは一見、人々の福祉に貢献することを目指す行為であるように見える。しかし一方で、定められた期限までに市が柵の設置、緑化を行わなかったとき、スタイベサントは自分が開発したスクエア周辺の住宅の価値を落としたとして市を訴えており、用地譲渡の意図は自分の不動産の価値を高めることであったのは明らかである¹⁴⁾。寄付という美名の影で、建設費用を行政に負担させて宅地開発を成功させようというこのスキームを、ボルチモアの地主たち、あるいは地主から土地を得たデヴェロッパー達も伝えているのであろうか。

一方、1823年の計画に緑地がないボルチモア市にとっても、市民からの土地提供による緑地建設は、用地買収の手間や金銭的負担が少なく行政の役割を果たすことができるので歓迎したのであろう。そしてスクエアの所有、建設が市の負担で行われたためか、ボルチモアのガーデン・スクエアは「パブリック・スクエア」と呼ばれており、全市民が利用できるよう、朝5時から夜10時までの間、門が開かれていた¹⁵⁾ * 4。とはいえボルチモアのスクエアは主に中流からアッパーミドル向けの住宅地に偏在するため、実質的にはそれほど多くの市民が利用できるわけではなかったことが推測され、また鉄柵で閉じたデザインはイギリスの慣例のままであったので、私有のガーデン・スクエアのイメージからはそれほどかけ離れた存在ではなかったといえる。

4. ガーデン・スクエアの鉄柵の撤去

ボルチモアのガーデン・スクエアやそれに準ずる緑地では、1870年前後までは常に鉄柵がとりつけられた。しかし、73年5月を境に突然柵の不要論が主流になり、スクエアから鉄柵が消えた。以下でその経過と意図を整理し、そして柵の撤去後の意図からガーデン・スクエアに起こった変化を確認する。

経過

ボルチモア・サン紙に初めて鉄柵の撤去の話題が

登場したのは、フランクリン・スクエアとラファイエット・スクエアについて市議会の第一部会で撤去とその後の改良が許可された1873年5月5日の翌日のことであった。続いて、5月6日の市議会の第二部会で、ワシントンとマウント・ヴァーノンの両スクエアについても同様の措置が許可されたことも報道された。ラファイエット・スクエアについては、さっそく6月3日に鉄柵の競売が行われ、6月下旬には柵がほとんど取り除かれた。そのほかでは、ユニオン・スクエアで75年から76年にかけて鉄柵が撤去され、フランクリン・スクエアもようやくその頃までに撤去が行われた。ワシントンおよびマウント・ヴァーノン・スクエアも、76年10月10日によりやく撤去が正式決定したが、工事が進められたのは80年代に入ってからのことである。またイースト・ボルチモア地区のマディソン・スクエアでは、80年に撤去された(表2)。

一方、鉄柵の撤去の記事が見られないものとしては、73年の時点でまだ開発されていなかったジャクソン・スクエアと、70年代末に建設が始まったとみられるジョンソンとコリントンの両スクエアがある。またこの時期は建設途中だったハーレム・スクエアは、75年に木製の柵とレンガの小屋を撤去した上で76年にオープンに至った。よって1873年以降に完成したガーデン・スクエアでは、柵は初めからないものとしてデザインされたことが推測される。

なお、ガーデン・スクエアに似た緑地のうち、ユートー・プレイスは70年代後半に、イースタン・シティ・スプリングでも、1881年に撤去が行われ、ブロードウェイ・スクエアでも鉄柵が撤去されてスクエアの幅が広げられた。パーク・プレイスについては鉄柵の状況がわからないが、81年の時点では「周辺は花崗岩の縁石」で囲まれていた。以上より鉄柵の撤去は、いわゆるガーデン・スクエアのみならず、市有の様々な緑地までを対象にしたムーブメントに発展していったようだ。

鉄柵撤去の意図

73年5月6日からしばらくの間、ボルチモア・サン紙において鉄柵の撤去に関する賛否が投書などで議論されたので、そこから関係者達の見方を推察したい。まず、サン紙自身の意見と考えられる記事では、柵がなく、花やその他の装飾的植物で飾られ

表2 ボルチモアのガーデン・スクエアの鉄柵撤去の経過

名称	鉄柵撤去の議論開始	鉄柵撤去時期	ガーデン・スクエア内部の意匠（鉄柵撤去後）	出典（新聞記事以外のフルタイトルは引用文献を参照）
ラファイエット・スクエア	1873年 5月5日	1873年 6月	鉄柵を撤去 人工石で舗装 8つある入口のそれぞれに2つの瓶飾り	Local Matters - Throwing Open the Public Squares, <i>Baltimore Sun</i> , May 6, 1873, 1 Local Matters - The Cows and Lafayette Square, <i>Baltimore Sun</i> , June 25, 1873, 1 Proceedings of the City Council, <i>Baltimore Sun</i> , September 30, 1873, 4 Local Matters - Franklin Square Improvement, <i>Baltimore Sun</i> , August 21,
フランクリン・スクエア	1873年 5月5日	1876年 まで	鉄柵を撤去 →重量のある花崗岩の縁石→大理石の基壇 →シンジジャー舗装 入口にアンティークの瓶飾り	Local Matters - Throwing Open the Public Squares, <i>Baltimore Sun</i> , May 6, 1873, 1 Local Matters - Marble Base Around Franklin Square, <i>Baltimore Sun</i> , November 4, 1874, 4 Local Matters - Franklin Square
ワシントン・(モニュメント)・スクエア マウント・ヴァーノン・プレイス	1873年 5月6日	1880年代	鉄柵を撤去 新しい歩道がレイアウトされ、舗装された モニュメントの南側のスクエアには噴水が建設され、花物植物や低木が植えられた。 西側のスクエアにはボルチモア・オハイオ鉄道のギャレット氏の負担でシャンゼリゼのものに似せた噴水が建てられた	Improvement of the Public Parks - Throwing Open Barriers do., <i>Baltimore Sun</i> , May 7, 1873, 1 Scharf, 279 Dorsey, 69-70
ユニオン・スクエア	不詳	1875年 から76年	鉄柵を撤去 歩道はコンクリートで舗装 入口には花用の瓶飾り	Local Matters - Flowers for the Public, <i>Baltimore Sun</i> , March 14, 1877, 1 Scharf, 279
ハーレム・スクエア	不詳	1875年	木製の柵とレンガの小屋を撤去	The Public Squares of Baltimore, <i>Baltimore Sun</i> , July 7, 1873, 4 From Proceedings from the City Council, <i>Baltimore Sun</i> , April 14, 1875, 4
ユートー・プレイス	1876年 1878年	1870年代 後半	彫刻などで飾られた豪華な噴水2つ (住人の寄贈による)	Scharf, 281
マディソン・スクエア	不詳	1880年	歩道はアスファルトコンクリートで舗装 曲がりくねった歩道に沿って緑陰樹 8つの入り口それぞれに大理石のはめ込みのある押し型レンガの台座にのる瓶飾りを設置	Scharf, 281
ブロードウェイ・スクエア	不詳	1881年 以前	鉄柵を撤去 スクエアの幅が広げられる	Scharf, 278
イースタン・シティ・スプリング	不詳	1881年	鉄柵を撤去	Scharf, 280

た植え込みを「何にも邪魔されず一般市民が観賞」できることが「人々の文化と良き趣味についての自信を示」すものであり、また治安の良さも示すと、柵のないスクエアが市民の文化の高さの指標として称揚された。柵が撤去された後の記事でも、「きちんとした人々の自尊心により植物や茂みが破壊されることから守られており、迷い込んだ子供が花を引き抜くということさえない。」と、人々のここがけのおかげで物理的な保護が不要である様子が誇らしく語られている¹⁶⁾。また、そうして美しいものに触れられるようにすることが「公衆の趣味を涵養」という、教育的効果も主張された。そして、それを正当化する事実として、鉄柵の撤去は大陸ヨーロッパでの傾向であることが添えられている¹⁷⁾。市議会でマウント・ヴァーノン、ワシントンの両スクエアに関して撤去を提案した議員カー氏もヨーロッパで例があること引き合いに出しており、かの地での動きは大きな説得力を持つものであったことがうかがえる。

一方、撤去に反対する投書は、これまで鉄柵設置のためにかかった費用を無駄にすることや、牛や犬

などの動物を排除できないことで緑地を台無しにする懸念、そしてそれを防ぐために必要な警備を挙げて、鉄柵の必要性を説いた¹⁸⁾。また別の投書は、ガーデン・スクエアは敷地の譲渡時に「それらは永久に柵で囲まれる」と定められるのが常であるので、その契約違反を指摘した¹⁹⁾。しかし、これについては、木製の柵との指定のあるフランクリン・スクエアで鉄柵が設置されていることなどから、約款を字義通りに解釈しようとすれば矛盾だらけになるので、譲渡される土地が「永久に公的なスクエアとして保持される」とだけ解釈すればよいのではないかと、という再反論が登場し²⁰⁾、それが人々の納得を得たのか投書は見られなくなった。

こうした表立った議論での理由づけが、鉄柵撤去の背景のすべてかどうかはわからない。例えば、ラファイエット・スクエアは市議会で了承を得た後数か月で鉄柵の撤去が完了したが、フランクリン・スクエアやマウント・ヴァーノン、ワシントンの両スクエアなどでは数年間工事が進まず、特にフランクリン・スクエアについてはサン紙に周辺住人から撤去反対の投書も届いた²¹⁾。よって、一部の、特に

ラファイエット・スクエアの関係者が推進したことが推測されうるが、それがなぜなのかは新聞記事の調査では解明するに至らなかった*⁵。とりあえず本稿では、大陸ヨーロッパに見られるという柵のないスクエアが高い民度のシンボルとして一部で評価され、それが市内のほとんどの緑地に適用されたという事実を示すにとどめたい。

鉄柵撤去後のガーデン・スクエアのデザイン

ボルチモアのガーデン・スクエアは、行政による所有、管理に加えて鉄柵が撤去されたことによって、イギリス由来の排他的緑地からいよいよ名実ともに分岐した。新しいデザインのスクエアの入口にはたいてい目印として1組の瓶飾りがあるだけで、歩道は街路の自然な延長のようであり、見通しがきく緩やかな勾配の芝生の向こうにはまた街路があり、街が公園の中にあるかのようである(図3)。しかしこの時代の公園は柵で囲まれたものがほとんどであったので、イメージとしては、むしろアメリカの郊外の一戸建て住宅のシンボルでもある広い芝生の前庭²²⁾に近いものではないだろうか。

こうした大まかな構成は全スクエア共通であるが、柵の撤去と同時に行われた改良工事の結果、質の面でその推進者が思い描くもの以下になったスクエアがあった。例えばフランクリン・スクエアについては、当初鉄柵を売却した資金の範囲で「重量のある花崗岩の縁石に取り換える」ことが市議会に提案されていたが、その後「大理石の基壇」にするための入札が行われ、最終的にはコンクリートによる「シ

リンジャー舗装」で処理されることになった。これはあるいは鉄柵の売却の入札が低調であり、一方大理石工事の入札で予想より高かった結果、資金がねん出できなかったためではないかとみられる。このコンクリートによる舗装はラファイエット、ユニオンの両スクエアの歩道でもみられることになるポピュラーなものであったが、当初の構想にあった大理石や花崗岩といった素材からは見劣りするであろう。

一方、ワシントンおよびマウント・ヴァーノン・スクエアについては、この頃が最も整備された時期であった。すなわち80年代に鉄柵が撤去されると修景が開始され、芝生は円または半円形に整えられ、動物彫刻や彫像が加えられた。モニュメントの西側のスクエアにはボルチモア&オハイオ鉄道のギャレット氏の寄贈でシャンゼリゼのものをモデルとした噴水が、また高低差のある南側のスクエアでも階段と組み合わせた噴水が建設された。なお、ユートー・プレイスの豪華な噴水も周辺住人の寄贈によるものである。市は公園建設に充てる税金を得ていたはずだったが、各緑地の内容を充実させるのは市民からの働きかけ次第の部分があったようだ。

5. まとめ

19世紀のボルチモアで建設されたガーデン・スクエアは、いずれの例でもその敷地が市に帰属した建設費も市が負担しているためか、鉄柵で囲まれてはいるが全市民にひらかれていた。更に1873年から鉄柵撤去のムーブメントが起き、市内のあらゆる緑地の鉄柵が取り払われ、またその後柵のある緑地は作られなくなった。これは大陸ヨーロッパの例を意識したものであり、柵がなくても緑地を台無しにしたりしない市民の文化レベルの高さを示すことができるということが理由の一つとして見られた。この結果、その利用実態のみならず意匠の面からもモデルであったイギリス式のスクエアから離れることになった。

図版出典

図1: Hayward Mary Ellen and Belfoure Charles: The Baltimore Rowhouse, Princeton Architectural Press, New York (2001) 内の Sachse E.: View of Baltimore City (1850)

図2: Gray's Atlas City of Baltimore Maryland, Stedman, Brown & Lyon, Philadelphia (1873)



図3 現在のラファイエット・スクエア

ジョンズ・ホプキンス大学図書館ホームページ
電子書庫「JSCHOLARSHIP」より

<https://jscholarship.library.jhu.edu/handle/1774.2/33655> (2011 年 9 月 20 日)

図 3：筆者撮影 (2010 年 3 月 24 日)

註

- * 1 ボルチモア・サン紙 (正式にはサン紙のボルチモア版) は 1837 年から現在まで続く同市の有力紙である。電子化されて検索可能であるので、創刊時から 1880 年までを調査対象とした。
- * 2 ポップルトンの都市計画が検討され始めた 1818 年の時点では、公の目的で使用する土地の選定やランドマークの建設計画なども目指されたが実現しなかった。計画については引用文献 7) 56-58, 9) 29, 11) 68 を参照。
- * 3 ガーデン・スクエア建設の終息は、アップーミドルの市民向けの住宅に郊外の一戸建てという選択肢が加わったこととも無関係ではないが、それは 1890 年代も終わりの頃のことであり、公園の充実の方がより直接的な理由と考えるのが自然であろう。ボルチモアの郊外住宅の登場については引用文献 9) 130-31 を参照。
- * 4 市の資金負担は必ずしも全市民の利用を保証するとはいえず、例えばボストンのサウスエンドには、市が所有、建設したガーデン・スクエアであるにもかかわらず、近隣住人が利用を独占したという例があった。あるいはボルチモアに比べてボストンの住人の立場が何らかの理由で強かったことも考えられるが、これについての判断は今後の比較研究をまたなければならない。ボストンのガーデン・スクエアについては引用文献 1) を参照。
- * 5 ラファイエット・スクエアは南北戦争時に北軍の野営地が作られたためかなり荒廃したが、市議会は費用を惜しんだため復旧が遅れていた。そこで 1870 年に地主ヘンリー・ネルらを中心にラファイエット・スクエア・アソシエーションが結成され、整備を進めた。そのため、73 年の鉄柵の撤去も、彼らの意向が関係した蓋然性が高いと考える。引用文献 4) 280 より。

引用文献

- 1) Goodman Phebe S.: The Garden Squares of Boston, University Press of New England, Hanover and London (2003)
- 2) *Baltimore Sun* (Enoch Pratt Free Library (ボルチモア市) 所蔵)
- 3) Baltimore City Register's Department: Report in Reference to City Property, made by the Register on the 23d of May, 1851, Printed by James Lucas, Baltimore (1851) (Maryland Historical Society (ボルチモア市) 所蔵)
- 4) Scharf J. T.: History of Baltimore City and County from the Earliest Period to the Present Day, Louis H. Everts, Philadelphia (1881) (Google books にて全文閲覧可能)
- 5) Latrobe Ferdinand C.: History of Baltimore City Parks [Harlem Improvement Association, Baltimore] (1908) (Enoch Pratt Free Library 所蔵)
- 6) Olson Sherry H.: Baltimore: The Building of an American City, The Johns Hopkins University Press, Baltimore (1980)
- 7) Dorsey J.: Mount Vernon Place: An Anecdotal Essay with 66 Illustrations, Maclay & Associates, Baltimore (1983)
- 8) Chapelle Suzanne Ellery Greene: Baltimore: An Illustrated History, American Historical Press, Sun Valley, California (2000)
- 9) Hayward M. E. and Belfoure C.: The Baltimore Rowhouse, Princeton Architectural Press, New York (2001)
- 10) Bowditch E. U.: Baltimore's Historic Parks and Gardens, Arcadia Publishing, Charleston SC (2004)
- 11) Hayward M. E. and Shivers F. R. Jr.: The Architecture of Baltimore: An Illustrated History, The Johns Hopkins University Press, Baltimore (2004)
- 12) Hayward M. E. and Belfoure C.: The Baltimore Rowhouse, Princeton Architectural Press, New York, 53 (2001)
- 13) Thompson Daniel Garrison Brinton: Ruggles of New York: A Life of Samuel B. Ruggles,

- Columbia University Press, New York, 58-59 (1946)
- 14) 鈴木真歩：19世紀のニューヨークにおける住宅地に関する研究—ブレ都市計画時代の不動産の力学と都市像—, 19世紀建築史研究の諸相, 日本建築学会建築歴史・意匠委員会, 30-31 (2009)
- 15) The Public Squares of Baltimore, *Baltimore Sun*, July 7, 1873, 4
- 16) Local Matters—Flowers for the Public, *Baltimore Sun*, March 14, 1877, 1
- 17) Unenclosed Public Squares, *Baltimore Sun*, May 7, 1873, 2
- 18) Unenclosed Square, *Baltimore Sun*, May 12, 1873, 6
- 19) Those Railings, *Baltimore Sun*, May 17, 1873, 5
- 20) Railing and Raillery About the Public Square, *Baltimore Sun*, May 31, 1873, 5
- 21) Unenclosed Square, *Baltimore Sun*, May 12, 1873, 6
- 22) Jackson Kenneth T.: Crabgrass Frontier: The Suburbanization of the United States, Oxford University Press, USA (1985)